

3例（1.5%）、0111は有症状者が2例（1.0%）、無症状者が1例（0.5%）、血清型不明では、有症状者が14例（6.9%）、無症状者が2例（1.0%）であった。その他の有症状者が3例（1.5%）、無症状者が4例（2.0%）であった。

性別では、男性94例（46.5%）、女性108例（53.5%）であった。

症状別・性別菌検出者数は有症状者（150例）では男性72例（35.6%）、女性78例（38.6%）、無症状者（52例）では男性22例（10.9%）、女性30例（14.9%）であった。

月別患者・保菌者届出数をみると、3月のみ届出がなかった。多い順に、8月の81例、9月の32例、次いで6月の24例、7月の22例で、この4か月で全体の78.7%を占めている。

都道府県別でみると、届出数の多い順に静岡県、東京都、神奈川県となっている。

（文責：大阪市）

4. 四類・五類感染症（全数把握分）

平成26年における四類・五類感染症の届出数は、29疾患1,068例であった。平成25年の27疾患3,990例に比べると疾患数は2疾患増加したが、届出数は2,922例（73.2%）の減少であった。

四類感染症の届出数は9疾患135例であった。前年と疾患数は同じで、前年届出がなかったライム病は1例、報告された。また、前年届出があったE型肝炎については報告がなかった。四類感染症の届出数は10例（8.0%）増加した。増加した疾患のうち、日本紅斑熱は5例の届出があり前年の1例に比し4例（400%）の増加であった。A型肝炎は35例の届出があり、前年の18例に比べ17例（94.4%）の増加であった。減少した疾患のうち、デング熱は21例の届出があり、前年の36例に比べ15例（41.7%）の減少である。なお、うち3例は代々木公園に端を発した国内発生事例であった。

五類全数把握感染症の届出数は20疾患933例であった。前年に比べ2疾患の増加であり、平成26年9月より追加されたカルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症、水痘（入院例）、播種性クリプトコックス感染症について、それぞれ38例、5例、2例の届出があった。増加した疾患のうち、クリプトスポリジウム症は2例の届出があり、前年の1例に比べ1例（100.0%）の増加である。麻しんは46例の届出があり、前年に比べ31例（206.7%）の増加であった。麻しんウイルスの遺伝子型はB3、H1やD8であり、輸入麻しんと考えられ、麻しん排除が前進している。減少した疾患のうち、風しんは18例の届出があり前年の3,198例に比べ3,180例（99.4%）の減少である。平成26年4月1日から、風し

四類・五類全数把握感染症届出数

種別	疾患名	届出数	
		大阪府内計	全国計
四 類	E型肝炎	0 (1)	154 (127)
	A型肝炎	35 (18)	433 (128)
	エキノкокクス症	0 (0)	28 (20)
	オウム病	0 (0)	8 (8)
	回帰熱	0 (0)	1 (1)
	Q熱	0 (0)	1 (6)
	コクシジオイデス症	0 (0)	2 (4)
	重症熱性血小板減少症候群	0 (0)	61 (48)
	チクングニア熱	1 (1)	16 (14)
	つつが虫病	1 (1)	320 (344)
	デング熱	21 (36)	341 (249)
	日本紅斑熱	5 (1)	240 (175)
	日本脳炎	0 (0)	2 (9)
	ブルセラ症	0 (0)	10 (2)
	ボツリヌス症	0 (0)	1 (0)
	マラリア	3 (2)	60 (48)
	野兔病	0 (0)	1 (0)
	ライム病	1 (0)	17 (20)
	類鼻疽	0 (0)	0 (4)
	レジオネラ症	66 (64)	1,246 (1,124)
レプトスピラ症	2 (1)	48 (29)	
四類合計		135 (125)	2,990 (2,360)
五 類	アメーバ赤痢	127 (106)	1,135 (1,047)
	ウイルス性肝炎	29 (23)	228 (288)
	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	38 (—)	321 (—)
	急性脳炎	27 (29)	469 (364)
	クリプトスポリジウム症	2 (1)	98 (19)
	クロイツフェルト・ヤコブ病	10 (10)	179 (207)
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	16 (9)	280 (210)
	後天性免疫不全症候群	207 (221)	1,538 (1,584)
	ジアルジア症	9 (12)	68 (82)
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	17 (7)	200 (108)
	侵襲性髄膜炎菌感染症	5 (1)	37 (23)
	侵襲性肺炎球菌感染症	126 (59)	1,825 (1,000)
	水痘 (入院例)	5 (—)	142 (—)
	髄膜炎菌性髄膜炎	0 (1)	0 (2)
	先天性風しん症候群	1 (5)	9 (32)
	梅毒	242 (158)	1,683 (1,236)
	播種性クリプトкокクス症	2 (—)	36 (—)
	破傷風	2 (3)	126 (128)
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	4 (7)	57 (55)
	風しん	18 (3,198)	320 (14,362)
麻しん	46 (15)	462 (230)	
薬剤耐性アシネトバクター感染症	0 (—)	15 (—)	
五類合計		933 (3,865)	9,228 (20,977)
合 計		1,068 (3,990)	12,218 (23,337)

()内は平成25年のデータ

疾患名	大阪府内再掲					
	大阪府	大阪市	堺市	東大阪市	高槻市	豊中市
アメーバ赤痢	32 (29)	72 (58)	8 (11)	3 (3)	6 (2)	6 (3)
後天性免疫不全症候群	20 (24)	172 (185)	9 (6)	1 (1)	5 (4)	0 (1)
梅毒	31 (25)	196 (115)	9 (12)	0 (3)	4 (3)	2 (0)
風しん	5 (1,025)	10 (1,388)	3 (309)	0 (275)	0 (115)	0 (86)

()内は平成25年のデータ

んに関する特定感染症予防指針が適用され、先天性風しん症候群発生の根絶や風しん排除に向け、取り組んでいる。

五類感染症の主な4疾患であるアメーバ赤痢、後天性免疫不全症候群、梅毒、風しんについて、大阪府内を大阪府、大阪市、堺市、東大阪市、高槻市、豊中市に区分して再掲した。

アメーバ赤痢は、大阪府が29例から32例に、大阪市が58例から72例に、高槻市が2例から6例に、豊中市が3例から6例に増加し、堺市で減少した。後天性免疫不全症候群は、堺市が6例から9例に、高槻市が4例から5例に増加したが、大阪府、大阪市、豊中市で減少した。梅毒は、大阪府が25例から31例に、大阪市が115例から196例に、高槻市が3例から4例に、昨年報告のなかった豊中市が2例に増加し、堺市、東大阪市では減少した。風しんはすべての区分で顕著に減少し、前年、東大阪市、高槻市、豊中市ではそれぞれ275例、115例、86例であったが、すべて0例となった。先天性風しん症候群は1例のみ報告で、前年の5例に比べ4例(80%)の減少であった。

全国の平成26年における四類、五類感染症の届出数を見ると、12,218例で前年の23,337例と比べて11,119例(47.6%)の減少である。増加した主な疾患は、四類感染症ではブルセラ症、A型肝炎、レプトスピラ症でそれぞれ2例から10例、128例から433例、29例から48例である。五類ではクリプトスポリジウム症、麻しん、侵襲性インフルエンザ菌感染症で、それぞれ19例から98例、230例から462例、108例から200例に増加している。減少した主な疾患は四類感染症ではQ熱、日本脳炎、コクシジオイデス症で、それぞれ6例から1例、9例から2例、4例から2例に、五類感染症では風しん、ウイルス性肝炎(B型、C型、D型、その他、不明を含む)、ジアルジア症で、それぞれ14,362例から320例、288例から228例、82例から68例に減少している。

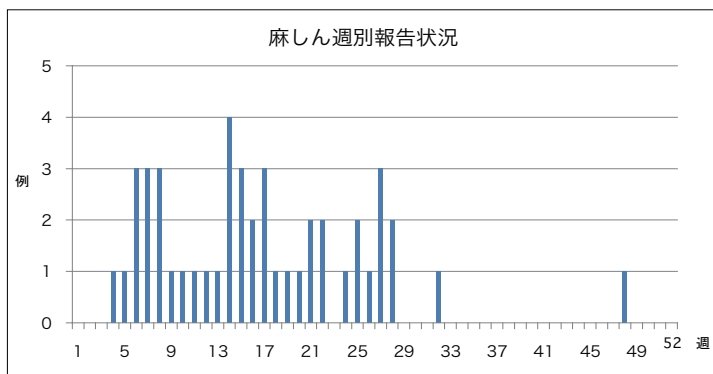
(文責：瀬尾、小林)

●麻しん

平成26年の届出数は46例であった。前年の15例に比べ31例（206.7%）増加した。

週別届出数は第14週が4例と最も多く、第4週から第28週まで第23週を除く全ての週で報告があり、全体の95.7%であった。

ブロック別では大阪市17例、三島9例、豊能・北河内・泉州6例、堺市2例であった。



年齢別届出数は、20歳以上が25例（54.3%）と過半数を占め、次いで6か月～1歳未満が7例（15.2%）、15～19歳が4例、10～14歳が3例の届出があった。

麻しん ブロック別・年齢別報告状況															
ブロック	6か月未満	12か月未満	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20歳以上	合計
豊能	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	6
三島	0	5	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	9
北河内	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	1	6
中河内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
南河内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
堺市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
泉州	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3	6
大阪市	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	13	17
合計	0	7	1	1	1	2	2	0	0	0	0	3	4	25	46

海外渡航歴のある輸入例はフィリピン5例、中国1例、インドネシア1例であり、各国ごとに麻しんウイルスの遺伝子型B3型、H1型、D8型が検出された。輸入例からの家族内感染や院内感染、職場感染が認められたが、日本国内の土着株による発生はなかった。

平成27年3月27日に世界保健機関西太平洋地域事務局により日本が麻しんの排除状態にあることが認定されたが、今後も引き続き麻しん患者からの感染拡大防止の為、積極的疫学調査を実施するとともに、麻しんウイルス遺伝子検査による確定診断が求められている。排除の状態を維持するため、今後も対策が必要である。

(文責：沼田、小林)